八尾市教育センターNEWS

令和6年2月
所報： 394号

相談支援係
072-941-3365

情報チーム
072-943-5785

研究研修係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから

『そだちのねっこ』

～乳幼児期の遊びより～

【「僕もしたいねん。貸してよー！」
～トラブルは人とのかかわりを楽しむためのチャンス～ 】

12 月 13 日（水）、３歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

ハンバーガーやジュース、ケーキ、お弁当などの食べ物をつくって遊ぶ子どもたちがいました。そこには、レジやメニュー表もありお店屋さんもできる環境になっていました。

Ａ（客）「すみませーん。いちごジュースください」　「ピンクのストローで！」
Ｂ（店や）「わかりました～」　「ピンクのストローはどこかな～」（あっ、あった！）
「ピンクのストローはありましたけど、いちごジュースは売り切れです」
Ａ（客）「じゃあ、何のジュースならありますか？」
Ｂ（店や）「みかんならありますよ」
Ａ（客）「じゃあ、みかんジュースでいいです」
Ｂ（店や）「はい、どうぞ！」

また、違う子どもがお客さんになってやってきました。
Ｃ（客）「すみませーん」　「ハンバーガーとポテトのセットでおもちゃもつけてください」
Ｄ（店や）「あ～、おもちゃは売り切れてます。すみませんね～」
Ｅ（店や）「ナゲットはいりますか？」　Ｃ（客）「はい。お願いします」
Ｅ（店や）「今、つくりますから、ちょっとお待ちください」
～ＤとＥが、フライパンでナゲットをつくりながら～
Ｄ（店や）「僕にもやらせて！」「そのソース貸して！」
Ｅ（店や）「今、使ってるから無理」
Ｄ（店や）「ちょっとだけ貸してやー。僕もソース使いたいねん」
Ｅ（店や）「・・・」（ナゲットを炒めてソースをかける）
Ｄ（店や）「貸して！」（Ｅが使っているソースを無理に取ろうとする）
Ｅ（店や）「もう！！待ってって言うてるやろ！」

どちらも、友だちとの会話を通したやりとりがどんどん繰り広がり、遊びが盛り上がっていました。その言葉選びは、自分が経験したことや身近な大人の真似からです。遊びを楽しむ中

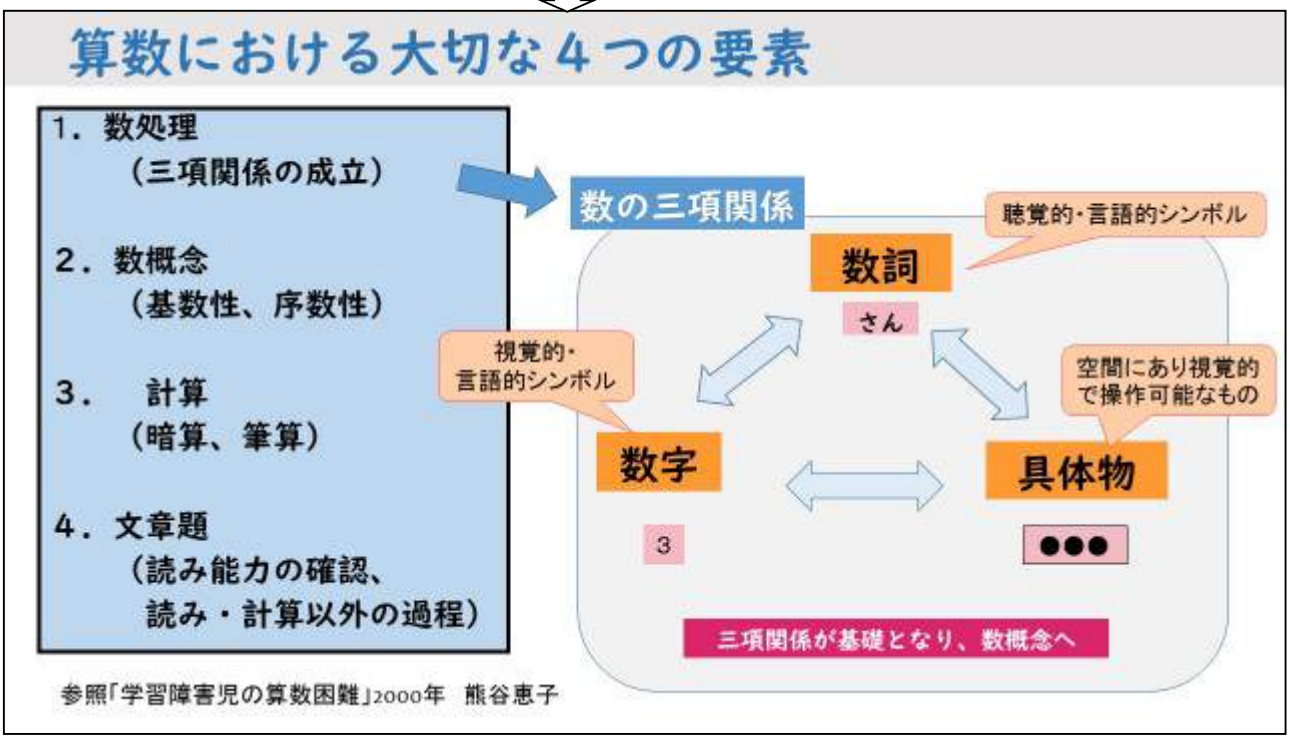
で、こんなことを言ったら友だちはどんな反応をするだろうか、どんな言葉が返ってくるだろうかと、わくわくしながらやりとりの言葉を選んだり考えたりしているようにも感じました。

また、友だちとのかかわりが増えてくると「僕もそれしたい！」「貸してほしい！」など、トラブルも多くなる時期でもあります。顔を見合わせて笑い合っているかと思えば、思いの違いで言い合いになることもよくあります。それぞれの思いを受けとめながら、納得いく方法を一緒に考え、再び笑顔で遊び出せるように導く保育者のかかわりも特にこの時期は重要な役割となります。トラブルを通して、自分の思いを主張すること、相手にも思いがあること、自分の思いと相手の思いに折り合いをつけることなどを学ぶとともに、人とのかかわりの中で社会性も身につけていきます。

『トラブル』は成長のチャンスであると捉え、友だちとかかわって遊ぶことが大好きになる集団づくりの根っこを育てていきたいと思いました。

通級指導教室担当者会⑩

令和６年１月１２日（金）午前９時３０分～午前１１時３０分に通級指導教室担当者会⑩を行いました。講師は一般社団法人発達支援ルーム「まなび」今村佐智子理事で、研修テーマは「算数・数学の指導①」です。　　研修で使用したスライドの一部

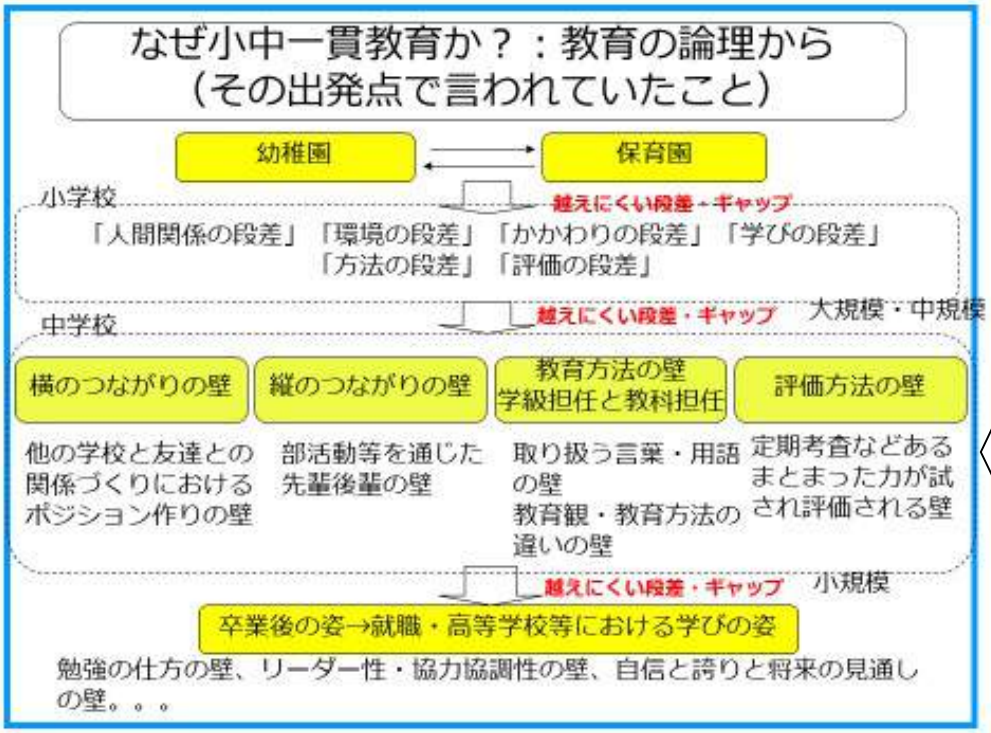


＜受講者感想＞

- 算数でつまずく児童が多いとは感じていたが、算数に必要な要素の多さに驚き、またアプローチのためのアセスメントも複雑だと感じた。計算ができていないという表面上の問題が、どこのつまずきからきているのかを「誤り分析」することが必要だというのがよく分かった。
- 算数指導についての知識はこれまでの経験上あるが、子どもの特性がどう表れ、どのようなつまずきになるのかをアセスメントすることが難しいといつも思っている。また、本人の長所を活かして伸ばしていく工夫を考えるところが難しく感じている。今日の内容は HOW TO ではなく、指導方法の羅列でもなかったので、大変勉強になった。つまずき分析から支援へという内容がおもしろかった。検査ではなくて子どもの様子を見て、アセスメントから指導へできるようになりたい。
- 算数につまずきを感じている児童でASDやADHDの特性を合わせもっていることで、個々の対応が大きく変わることが分かり、しっかりアセスメントを行いその児童にあった方法が

必要だと思った。また、序数性や基数性の観点から、しっかり子どもたちのつまずきを、見取っていくことが大切だと感じた。事例を使った教材の紹介やアセスメントの仕方がとてもわかりやすかったので、本校でも活用していきたい。

小中一貫教育担当者研修②



令和６年１月 12 日（金）午後３時～午後５時に小中一貫教育担当者研修②を行いました。講師は関西大学小柳和喜雄教授で、研修テーマは「小中一貫教育担当者の役割と意義について」です。

研修で使用したスライドの一部

＜受講者感想＞

- アンケートの数値を改めて比較することで、中学校区の実態や課題を見ることができた。中学校区交流を行うだけでなく、内容の吟味や、子どもの実態に合っているかを精査して考えていく必要があると感じた。また、小中一貫教育の担当者で交流を行い、効果を検証して今後の取り組みに活かしていきたい。
- 中学校区で交流する機会の保障だけでなく、中身をどのようにしていくかを考える機会になった。また、最高学年だけでなく、高学年 4～6 年で中学校と交流するあり方も有効だと感じた。
- 小中一貫教育での効果が、教科によって大きな違いが見られた。学期に１回部会での交流・授業公開を実施しているが、引き続き授業の改善や指導法の交流を深め具体的な改善につなげていきたい。

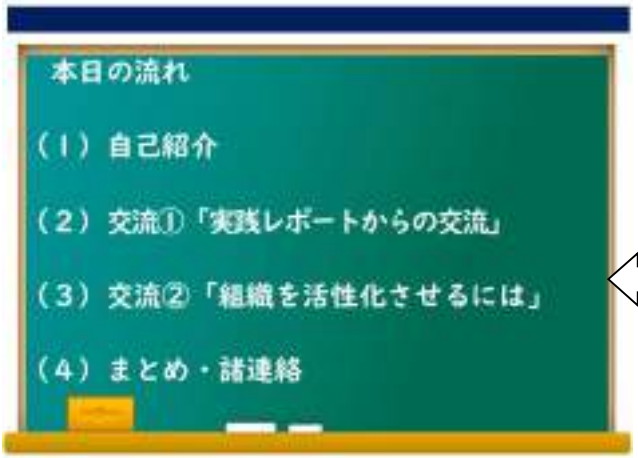
内容別特別支援教育研修 A

令和６年１月 12 日（金）午後３時３０分～午後５時に内容別特別支援教育研修 A を行いました。講師は大阪府立八尾支援学校北野香指導教諭石崎宮子教諭で研修テーマ「知的障がいのある子どもの理解及び指導の実際」です。

研修で使用したスライドの一部

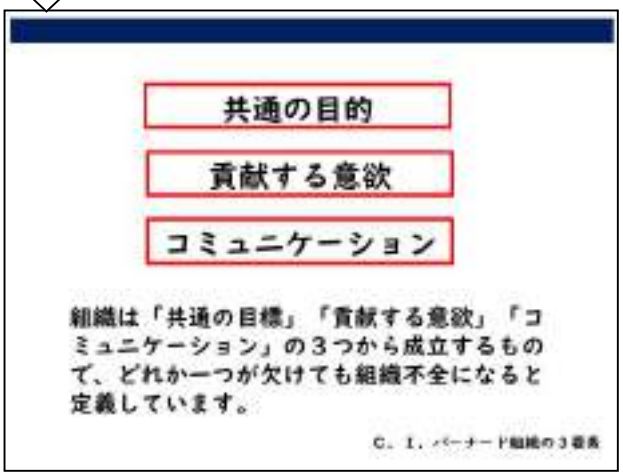
＜受講者感想＞
・「褒める」ことを大切にしていきたいと思う。また、できない、やらないことに対して注意したり、叱ったりする前にできるだけ原因を探っていきたい。
・子どもを知り・認め・褒めることの大切さを改めて感じた。周りの子と比べるのではなく、過去の本人の姿と比べてどうかを見ていく、という言葉が印象に残りました。
・就学するまでの環境や体験がその後につながっていくと感じたので、その観点で日々の保育を見直していきたいと思う。

１０年経験者研修④



令和６年１月１６日（火）午後３時～午後５時に１０年経験者研修④を行いました。講師は本センター山野元気指導主事で研修テーマは「組織づくり　チームビルディング【検証】閉講に当たって」です。

当日使用したスライドの一部



＜受講者感想＞
○『組織づくり「チームビルディング 」』を振り返って自身の強みや学んだことを今後、学校でどのように活かすか。
・コミュニケーションの大切さを実感したので、自分から声をかけて人の話を聴いたり、話しやすいシステムをつくっていくことも大切だと気付いたので実践していきたい。
・校務分掌をどう改善していくかについて、有意義な話し合いを行うことができた。そのためには共通目的、計画性、協調性が必要だと思う。来年度、同じ分掌になるとは限らないが、どんな分掌を担っても意識していきたい。
・コミュニケーションの取り方について、今日の研修で学んだやり方がとても参考になった。今後、自分流のコミュニケーション術を磨いていきたいと思う。
○１０年目を終える教員として、今後身につけていきたいことを書いてください。また、なぜそのように思ったのか。
・今回の交流を通して、それぞれの先生方の多様性について気付くことができた。校内でも一人ひとりの先生の良いところを活かせるように、折り合いをつけて取り組んでいけるような教員になりたいと思う。また、発表や話し合いの時に、端的に、わかりやすく要点をまとめて、話せるようにしたい。
・「待っていても組織は動かない」ということが実感できた。組織を動かすためには知識とある程度の経験、そしてコミュニケーション力が必要だと感じた。また活性化するためには、目的の明確化も欠かせないところではあるので、何のためにそれをするのかをそのときのニーズに合わせて話し合っていく力を身につけたい。
・経験年数の少ない先生方が働きやすくなるように心がけ、必要に応じて厳しさをもって接することもできるようにしていきたい。自分がどのような存在として学年や学校全体のリーディングをしていくか、しっかり考えていきたいと思う。

２年次研修（令和４年度初任者研修第２５回）

令和６年１月１８日（木）午後３時～午後５時に２年次研修（令和４年度初任者研修第２５回）を行いました。講師は本センター鈴木雅博指導主事で、研修テーマは「授業づくり⑩　～授業研究報告～」です。今回の研修をもって令和４年度の初任者は法定研修としての「初任者研修」を終了しました。

当日使用したスライドの一部

＜受講者感想＞

〇授業づくり実践交流から学んだことや気づいたことを整理してください。

・いろいろな学年の先生と話をし、どの学年でも共通の課題や悩みがあることがわかった。効果的な板書や的確な発問、主体的に児童が参加できる授業の工夫など。これからも共に悩みながら前向きに頑張っていきたい。

・授業を行う上で感じる課題について、今回の研修を受けて選択肢が増えたように思う。例えば、日常生活の中から授業へと繋げたり、他の教員と連携して授業に取り組むなど様々な方面でのアプローチを知ることができた。

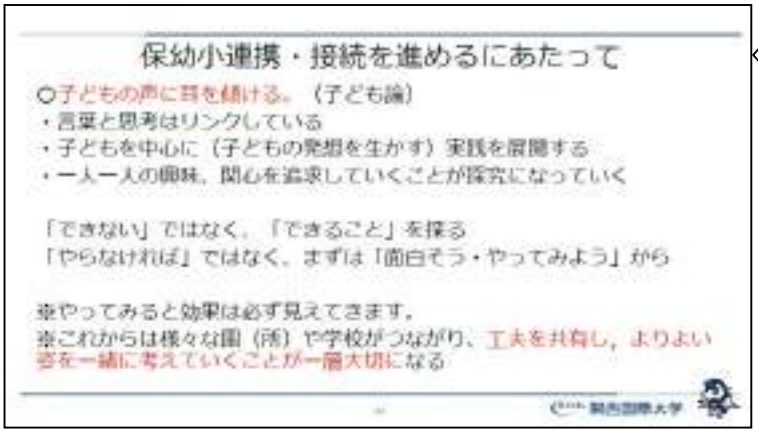
〇授業づくりについての成果と課題を書いてください。そのうえで、今後の自分の授業改善について必要なことを書いてください。

・ルーブリックを使用することで、他教科でも振り返りの質は向上したと感じた。しかし、学習の仕方、次時での改善点についての振り返りは十分書けているとは言えない。どのように書けば良いかを後二ヶ月の間に伝えていきたい。

・授業づくりの成果は、クラスの実態に応じてめあてを設定したことである。授業以外でもその成果を活かすことができた。１人で活動するときに不安を感じる児童が多かったため、「自由に考えて表現することが間違いではない」ということをテーマに授業を作った。この授業後、自信を持って活動する児童が多くなったように感じる。課題は評価の仕方で、授業準備の段階でしっかり考えておかないといけないと実感した。これからは子どもたち同士を繋げ、発言を生かして行く授業を作るために、しっかり教材研究・授業準備をしていきたい。

幼・保・こ・小合同研修会④

令和６年１月１９日（金）午後３時３０分～午後５時に幼・保・こ・小合同研修会④を行いました。講師は関西国際大学の椋田善之准教授で、研修テーマは「幼・保・こ・小連携・接続の重要性について～実践交流を通して見えてきたこと～」です。



⇦ 研修で使用したスライド

＜受講者感想＞

- 多様な能力を培うために、遊びが大切であるということを再認識した。そのために、環境設定や声掛けの重要性にも気付いた。
- 「幼児教育では適応を意識しすぎない」という言葉が心に残った。子どもたちがやりたいという思い＝動機付け、は小学校の授業でも同じようなことが言えると思う。できるだけ意識してやっていきたい。
- 「遊び込める子は学び込める子」という言葉にハッとした。失敗しても子どもたち主体で工夫したり対話したりできる遊びの場を大切にし、禁止・介入をできるだけ減らして質の高い保育をめざしていきたい。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターＢ棟（東側）の２階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も２週間の貸し出しを行っております。今回は１月から２月に配架した雑誌の誌名と目次の一部を紹介いたします。

「指導と評価」（日本教育評価研究会）　２月号
- 特集１　令和五年度全国学力調査の分析
- 特集２　教師のワークライフバランス

「道徳教育」（明治図書）２月号
- 特集　授業でそのまま話せる！人物教材の説話・雑談ネタ辞典

「月刊学校教育相談」（ほんの森出版）２月号
- 特集１　絵本の力で子どもの心を育てよう
- 特集２　アセス実施後、結果をどう活用するか

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）２月号
- 第１特集　子どもの内面の育ちを支える
  ～自分とよりよく向き合うために～
- 第２特集　共生社会の中で、夢や志をもち、主体的に活躍する子どもたち
  ～多様な個性が輝く特別支援教育を目指して～

「初等教育資料」（文部科学省教育課程課・幼児教育課編集・東洋館出版社）２月号
- 特集Ⅰ　ICT 活用の更なる充実
- 特集Ⅱ　[家庭]家庭科における消費者に関する教育の充実

「中等教育資料」（文部科学省教育課程課編集・学事出版）２月号
- 特集　高等学校における資質・能力の育成に向けた教育活動の充実②
  ＜理科,保健体育,芸術,外国語＞

教育科学「国語教育」（明治図書）２月号
・特集　保存版　今日から使える国語授業のちょこっと「支援」大全

「国語教育」（明治図書）　２月号の特集は上記のとおりです。「保存版」、保存するに値するほど素晴らしい内容ですよ、という宣伝文句ですが、ぜひ一読していただいて、真偽のほどを確かめていただきたい。さらに「今日から使える」、せめて一晩考えてからでも遅くはないのではないかと思うのですが、「今日から」だと言う。教師は雑誌の記事に書いてあることを、その日のうちに授業で使うほど忙しいのでしょうか。少し意地悪な書き方かもしれませんが、記事の「支援」の中身は決して悪くありません。ただ、しっかり読み込んで、考えて、自分なりに吟味しておかないと有効な活用は難しいように思います。

さて、同紙の８４ページに【特別寄稿】授業に潜む「マルトリートメント」とその改善（東京都杉並区立済美養護学校　川上康則）、という記事があります。教育用語にもカタカナが多く、タイトルだけでは内容が分かりづらいのが常です。私の勉強不足ゆえ、かもしれません。何のことかわからないだけに興味をそそられます。「授業」に潜んでいるといわれるとなおさらです。マルトリートメントは英語で「不適切な養育・関わり」を意味するそうです。インターネットで調べてみると広義の「虐待」とさえ言われます。WHO はチャイルド・マルトリートメント（Child Maltreatment）を定義していますが、この場合も、意図しない無意識の行為も含まれます。著者は Classroom Maltreatment という言葉をつくられました。例えば、頭ごなしの強い叱責や威圧的な指導、見捨てるような言葉、脅すような言葉、必要以上に強いルールの設定、連帯責任を負わせる。日常的ではないにしろ、学校でこのような指導が行われている可能性はあるかもしれません。このような指導が行われる教師側の事情として、著者は「正義のフィルター」として整理されています。極めて多忙な上に孤独な状況の中で、自分の感情・指導が正しいものとして思い込み、子どもへの怒り・イラ立ち・憤りを子どもに向けてしまうというのです。著者はこれを防ぐには「良質なコミュニケーションを保つこと」、教室を温かい「風」で包み込むよう心がけることが必要とされています。「風」とは教師の立ち居振る舞い、佇まい、言葉遣い、表情などが含まれるそうです。具体的には次の５点が大切だと指摘されています。

（１）　**待つ**：子どものペースを尊重する。
（２）　**その子なりの行動の意味を考える**：「逸脱行動は即指導」ではなく観察する。
（３）　**寛容度を上げる**：リトライのチャンスをつくる、「その子らしさ」を失わせないようにする。
（４）　**力に頼らない**：権威勾配を緩やかにし、上位下達ではなく「横」から関わる。
（５）　**子どもの意見を聞く、そして言葉を選ぶ**：大抵は大人が話し過ぎている、掛ける言葉を選び抜く。

（葭仲）

教育科学「社会科教育」（明治図書）２月号
・特集　見方・考え方を鍛える！「問題解決学習」成功の極意

「新しい算数研究」（新算数教育研究会編集・東洋館出版社）２月号
・第１特集　データの活用領域における数学的な見方・考え方とその成長とは？
・第２特集　学年進行に伴い統計的探究的サイクル（PPDAC）をどう実現していくか？